

平成18年7月1日

(第62号)

# 鵜 戸



暑中お見舞い申し上げます

鵜戸神宮ホームページ <http://www.btvn.ne.jp/~udojingu/>

発行者兼編集者  
鵜戸神宮社務所

# 大祓と古事記



宮司 杉田秀清

六月三十日は、全国の神社で「大祓」の神事が行われます。鵜戸神宮では、儀式殿の前庭に注連縄を張り巡らし、古式にのっとり厳肅に斎行され茅の輪くぐりの後、罪穢れをうつした「人形」を大海原に祓い遣り、身を清めます。

「古事記」は神々の誕生や建国の由来と、第一代神武天皇から第三十三代推古天皇までのことを書き記した日本最古の書であります。この書は奈良時代初期の和銅五年（約千三百年前）に記され、当時記憶力にすぐれた碑田阿礼という人が暗誦する伝誦や歴史を太安万侶が記録し、時の

元明天皇に献上したもので、古事記には、日本人の本来的に持っている自然観や慣習、考え方などが飾らず素朴に記されているといわれています。したがって、この本を研究することにより、日本人の古来からの精神や文化を明らかにすることが出来ると、江戸時代から本居宣長をはじめ多くの学者により研究が進められてまいりました。今では外国人までが研究したり、絵画を描いたりしています。

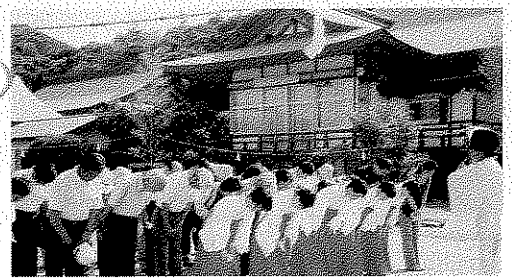
古事記には、上・中・下巻よりなり、上巻には天之御中主神より鵜戸神宮の「鵜尊草葺不合命」まで

のことが記されています。多くは神々の誕生の由来が記されています。

さて、その古事記によりまずと神代の昔、伊邪那岐命と伊邪那美命の二柱の大神は、ご結婚され、数々の神をお生みになられます。最後に火の神をお生みになった伊邪那美命は、その為に神避りになりまして黄泉の国に行かれました。伊邪那美命を恋しく又、会いたいと思われ黄泉の国を訪れた伊邪那岐命は、その時思いもかけず汚穢にふれられて逃げ帰られることになりました。伊邪那岐命は、この穢れを振り払うために「禊」をしなくてはと「筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原」に到りて禊祓をなされました。その時にお生まれになったのが、天照大御神、月読命、須佐之男命の三貴神でした。神代の時代、最も厳肅にして貴い神々の誕生は、

こうして「みそぎ」によりお生まれになったのです。「禊」や「祓」のことが記されているのは、古事記の上巻の伊邪那岐命と伊邪那美命に関するところからです。

大祓は今日に至るまで六月晦日（夏越の祓）と十二月大晦日に行われていきます。今日は庭上で修祓を行い「人形」に身の罪穢れを托して、川や海に流し祓い遣るようになりました。古代より今日に至るまで穢れを祓い清め、すがすがしい精神

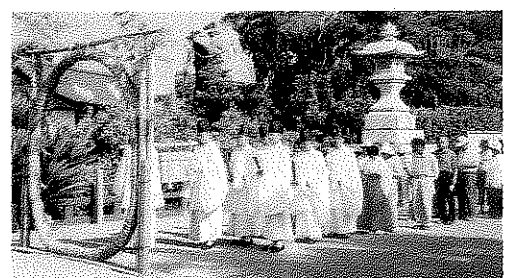


修祓

に立ち直そうとする心情は私達の心の中に素直に生きているのです。

神社において清浄さとは大切な意味を持つています。だから、祭典の前には参籠し言動を慎み、禊祓を行って身を清め心身の清浄を保ち、その上流水を祓いとして祭典に臨むのです。みな月のなごしの祓する人は千年の命のぶといふなり

これから暑い日が続きまます。ご健康に留意され心豊かにお過ごし下さい。



茅の輪くぐり

## 例祭 齋行

好天に恵まれた二月一日、責任役員をはじめ県内外の神社関係者、崇敬者他多数の参列を賜り、午前十一時三十分より厳肅に例祭が斎行された。

祭典に先立ち、福岡藩伝柳生新影流兵法が奉納され、参列者は継承されてきた剣術に引き込まれていった。

凛とした空気の中、宮司以下祭員が参進。修祓。開扉、海山幸の献饌。宮司祝詞奏上に続き、本庁幣が献ぜられ献幣使が祭詞を奏上した。この後、舞楽「蘭陵王」が奉納された。

この舞の由来は諸説あるが、もともと有名なのは中国の北斉の王・長恭（六世紀）の話である。この王はあまりに容貌が美しかったので、戦場で味方の士気が上がらなかつた。その為

獯猛な面をつけ味方を勢いづけ連戦連勝を飾った。その勝利を祝って作られた舞といわれている。

奉祝行事として二月三日には、第三十四回鵜戸神宮奉納四半の大会が開催され、四十二チーム、百八十九名の参加があった。この日は思いのほか風が強く、参加者は四圍半先にある的に、より慎重に狙いを定めていた。

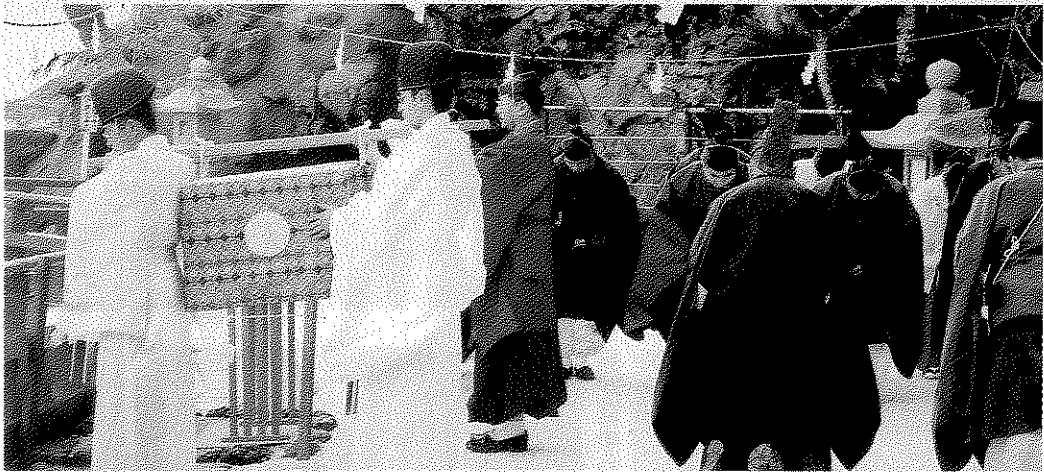
二月五日には、第五十三回剣法発祥鵜戸山顕彰剣道大会が開催され、県内各地より団体戦に百五十二チーム、女子個人戦に百五十七名が出場した。

当神宮は剣法の三大源流の一つである陰流の創始者・愛洲移香が神窟の中で剣術の妙を得たとされ、以来この地が剣法発祥の地とされている。

この大会は、全国でも古い歴史と伝統を持つ剣道大会であり、女子剣士の個人

戦はもとより小学生から一般の団体戦まで行われている。当日は、剣士たちの熱

戦が繰り広げられ、剣道の全国誌「剣道日本」の取材も行われた。





### 春の縁日大祭齋行

かつて旧暦三月の祭礼日は、祈願を受ける参拜者で賑わったと伝えられている縁日大祭が、三月二十五日午前十時三十分より齋行され、責任役員をはじめ多数の参列を賜った。

往年の賑わいを呼び戻すため奉祝行事として、日本民謡協会日南支部会員による「シャンシャン馬道中

唄」、当神宮職員による「豊栄の舞」、舞楽「蘭陵王」、平成十一年に二十年ぶりに復活した「鵜戸さん獅子舞」が奉納された。

参列者や参拝された観光客は、「貴重な舞が見られたり歌を聞くことができ、大変うれしい」と顔をほころばせていた。



### 祈年祭齋行

今年の五穀豊穡と国家との安泰を祈る祈年祭が、二月十七日厳肅に齋行された。

当日は、農業関係者他多数の参列を賜り、午前十時三十分より宮司以下祭員により奉仕された。宮司祝詞奏上の後「浦安の舞」を奉

奏。参列者は玉串を捧げ豊作を祈念した。

このお祭は、農業を主としてきた日本人にとって、古より執り行われてきた大切な祭典である。現在は農業はもとより、工業・商業・漁業など諸産業の生成発展を祈る祭典となっている。



### 御田植祭齋行

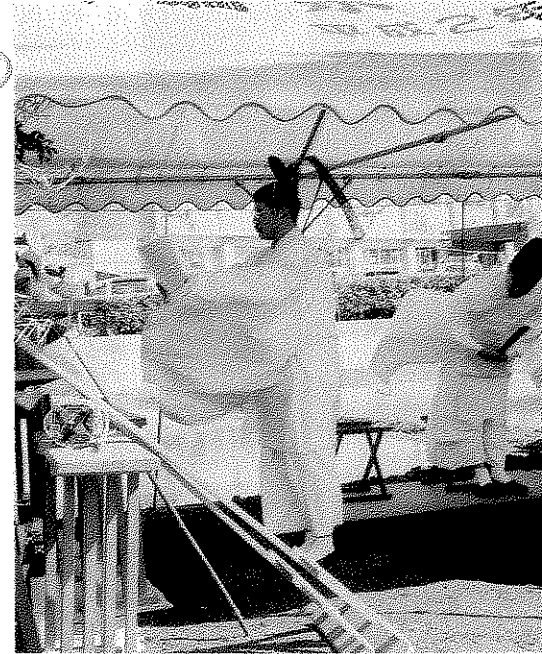
好天に恵まれた三月十四日、鵜戸地区の約二アールの御神田にて多数の参列を賜り御田植祭を齋行。齋主が稲の順調な生長を祈願し、水口奉幣の儀・代播きの儀が執り行われた。

この日に向け二月には播種祭が行われ、初が苗床に蒔かれた。三月に入ると御神田清祓祭が齋行され、準備が進められてきた。

祭典終了後、かすりの着物に編みがき姿の早乙女や氏子、小学生が横一列に並び御神田に足を入れた。

田植は、「お田植、はじめませ」の掛け声を台図に、コシヒカリともち米の苗を丁寧に植えていった。

今後は七月の抜穂祭まで、毎月の御神田月次祭にて稲の生育を祈願していく。





「鵜戸さん参りは春三月よ…」の歌い出しが始まる。シャンシャン馬道中唄の第二十回全国大会が、三月二十五日・二十六日の両日開催された。

初日は、日南市文化センターにて予選が行われ、県内外から四百五十名が出場。

二日目は、会場を当神宮儀式殿に移し決勝戦が行われ、年齢ごとに分かれた八部門の優勝者の中からグラ

ンドチャンピオンが選ばれた。

会場は、足の踏み場もないほど民謡愛好家で埋まり、出場者は太鼓や三味線尺八などに合わせ、張りのある声を披露した。

又、決勝当日は、当地方の風習であったシャンシャン馬道中の鵜戸さん参りが再現された。

今年は、一般応募で二組の新婦さんが選ばれ、単衣の着物、手甲脚絆に草鞋は

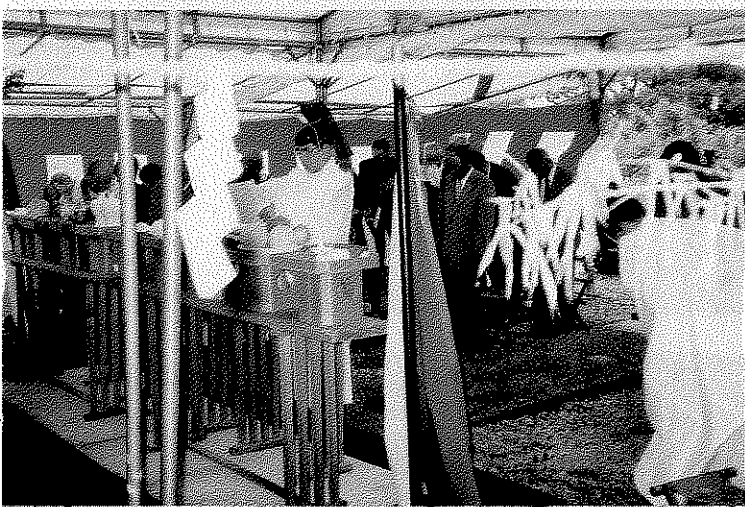
## シャンシャン馬道中唄全国大会開催

きの姿で本殿に正式参拝。この後、花嫁が乗った馬の手綱を花婿が引いた。生憎の小雨模様ではあったが、多くの参拝者は昔ながらの出で立ちの新婦さんにカメラを向けていた。

尚、シャンシャン馬のいわれは、馬の首につけてある鈴が一足ごとにシャンシャンと鳴ることからきている。

日	時間	祭	祭名
1日	10時	一之卯	月次祭・神穀感謝祭
2日	10時	二之卯	月次祭・神穀感謝祭
3日	10時	三之卯	月次祭・神穀感謝祭
4日	10時	四之卯	月次祭・神穀感謝祭
5日	10時	五之卯	月次祭・神穀感謝祭
6日	10時	六之卯	月次祭・神穀感謝祭
7日	10時	七之卯	月次祭・神穀感謝祭
8日	10時	八之卯	月次祭・神穀感謝祭
9日	10時	九之卯	月次祭・神穀感謝祭
10日	10時	十之卯	月次祭・神穀感謝祭
11日	10時	十一之卯	月次祭・神穀感謝祭
12日	10時	十二之卯	月次祭・神穀感謝祭
13日	10時	十三之卯	月次祭・神穀感謝祭
14日	10時	十四之卯	月次祭・神穀感謝祭
15日	10時	十五之卯	月次祭・神穀感謝祭
16日	10時	十六之卯	月次祭・神穀感謝祭
17日	10時	十七之卯	月次祭・神穀感謝祭
18日	10時	十八之卯	月次祭・神穀感謝祭
19日	10時	十九之卯	月次祭・神穀感謝祭
20日	10時	二十之卯	月次祭・神穀感謝祭
21日	10時	二十一之卯	月次祭・神穀感謝祭
22日	10時	二十二之卯	月次祭・神穀感謝祭
23日	10時	二十三之卯	月次祭・神穀感謝祭
24日	10時	二十四之卯	月次祭・神穀感謝祭
25日	10時	二十五之卯	月次祭・神穀感謝祭
26日	10時	二十六之卯	月次祭・神穀感謝祭
27日	10時	二十七之卯	月次祭・神穀感謝祭
28日	10時	二十八之卯	月次祭・神穀感謝祭
29日	10時	二十九之卯	月次祭・神穀感謝祭
30日	10時	三十之卯	月次祭・神穀感謝祭
31日	10時	三十一之卯	月次祭・神穀感謝祭

平成十八丙戌年鵜戸神宮神事一覧表(七月～十二月)



## 别当宮司先賢慰霊祭齋行

五月二十六日降りしきる雨の中、鵜戸山別当墓地において別当宮司先賢慰霊祭が厳かに齋行された。

祭典には、歴代別当宮司遺族をはじめ多数の参列を賜り、樂が流れる中、神饌

が供えられた。宮司祝詞奏上の後、潮満寺住職・伊勢木俊真氏、願成就寺住職・川崎光俊氏、王樂寺住職・甲斐裕隆氏により法要が厳修された。

この墓地には、天台宗の

僧と伝えられる光喜坊快久(第一世)から第五十九世觀空法印までの御霊が祀られており、第六代宮司後藤幸平氏(昭和二十三年、二十九年)から神仏合同の慰霊祭として齋行されてきた。

### 龍の彫刻奉納

北海道函館市在住の福嶋聰氏、福嶋勉氏により龍の彫刻一点が奉納された。奉生巨祭は四月四日、福嶋聰氏他六名の参列のもと斎行され、感謝状が手渡された。



### いさみ太鼓奉納

そろいの鉢巻、ハッピ姿の子供たち五十名が、五月五日の子供の日に「いさみ太鼓」を御本殿にて奉納。鵜戸の大神様と祖先の恩に感謝し、健やかな成長を祈った後、「いさみ太鼓はじめませ」の掛け声を合図に元氣よく太鼓を打ち始めると、参拝者もしばし足



を止め興味深そうに見入っていた。当神宮下の荒磯に打ち寄せ砕け散る荒波の様を太鼓・笛・鈴の軽快なリズムで表現し、これに合わせ子供獅子が勇壮に舞う「いさみ太鼓」は、昭和五十一年に創案された。



砕け散る荒波

### 新職員紹介

出仕 佐師慶保

生年月日

昭和五十九年二月十四日

最終学歴

國學院大學神道文化学部

趣味

音楽鑑賞



巫女 杉元美香

生年月日

昭和六十二年四月十七日

最終学歴

日南学園高等学校

趣味

読書



### 境内の植物

カイコフス

ブラジル原産の落葉小高木で高さ四〜八mになる。江戸末期に渡来。葉は長い柄のある三出複葉で互生。六〜九月、枝先に花序を出し、深紅色で長さ5cmほどの蝶形花を開く。  
別名 アメリカカダイゴ

